みんな違って、みんな幸せ
― バングラデシュ見聞録 ―

前在バングラデシュ日本国大使館付属ダッカ日本人学校教諭
イスタンブル日本人学校教頭　上田　慶二

キーワード：自然、家族、個性、施し、活気

ダッカ日本人学校の概要
《学校名》 在バングラデシュ日本国大使館付属ダッカ日本人学校
現地表記　JAPANESE SCHOOL DHAKA, Under Occupancy of Embassy of Japan
所在地 Plot No.9, Block-H, Pragati Sarani Road, Baridhara , Dhaka-1212, Bangladesh.
Phone: +880 (0) 1729-090673
Web Site: http://www.jsdhaka.com

1.　テーマ設定の理由

私は国内の小中学校で勤務しているとき、数十年間、地元にあるアジア保健研修所（愛知県日進市）の協力・支援を受けて、アジアの研修生と児童生徒の交流活動を中心に「生きた」異文化教育を進めた。そのときにバングラデシュの研修生と出会っていて、彼が言った「私たちの国は貧困だけれど、幸せに暮らしている」という言葉が印象的だった。

ダッカ日本人学校に赴任が決まったとき、私はバングラデシュ国の治安、文化伝統や政治経済などについて、図書資料やインターネット情報などをもとに調べた。すると、「貧困」「インフラ未整備」「交通渋滞」などのワードが、バングラデシュの代名詞のように表現され、アジア最大の貧困国とまで言われているらしい。

私はカウンセラーとして国内の人と相談した際、「空気を読む」「周囲と波長を合わせる」「同調圧力に押しつぶされる」など周囲との関係を意識し過ぎるあまり、生きづらさを感じている人が多いことに気づく。誰しもが自分らしさを発揮しながら、幸せな生活を望んでいるはずなのに、人間関係にストレスを感じながら生活をしている。

私は、バングラデシュに赴任するにあたって、彼らは日本人と同じ人間関係のストレスをもって生きているのだろうか、また彼らの生き方は、自分らしさを発揮し幸せな生活が送れているのだろうかと考えた。

これらの課題を解決するためには、現地の「人」「もの」と多方面にわたって直接関り実地調査し体験活動に取り組むことが妥当と考え、次のようなテーマ「みんな違って、みんな幸せ　ーバングラデシュ見聞録ー」を設定して、実地調査を進めた。

2.　フィールドワーク（実地調査）場所

令和３年４月にダッカ日本人学校に着任して、住まいのあるバリダラ地区の散策から始まり、以下のようにフィールワークを進めた。

日	場　所
令和3(2021)年	
6月18 日	オイスカ農場（バングラデシュ）：日本の支援農場見学
7月19 日	犠牲祭での牛やヤギの解体と施しの様子
7月26 日	バリダラ地区（外国人居住区）で行われた結婚式に参加
8月22 日	民族博物館：ヒンズー教とバングラデシュの伝統、スターモスク：日本の富士山の絵が描かれている
8 月23 日	少数民族ガロ族の街とクリスチャン教会と小学校敷地内見学
8 月24 日	ダッカ市内のグルシャン市場見学
8 月28 日	ガンジス川支流の川下りと川沿いに生活する村の訪問
10月 1 日	バングラデシュ準公立女子校訪問
10月 8 日	スタッフの村訪問
10月30日	バングラデシュの列車乗車体験：空港駅から旧ダッカ駅
11月13日	ドライバーの自宅訪問と周辺の小中学校訪問
11月20日	ナショナルスタジアム、（高校サッカー試合、ナショナルプロサッカー大会試合観戦）
11月27日	ナショナルモスク訪問
12月 5 日	ナショナル・インデペンデンス・シンボル(独立記念碑)訪問
12月26日～28日	コックスバザール（120ｋｍビーチ:世界最長）
令和4(2022)年	
6 月 3 日	ダッカ動物園訪問
	ジョイティソサイティ（ジョシール市）施設訪問
7月27日～ 29日	夏）施設紹介・小学校での授業実践・遺跡見学・詩人の生家など
12月23日～25日	冬）小学校での授業実践と研究会・ヒンディーの神事見学
8 月 3 日	繊維工場訪問
10月19日	国際エンゼル協会施設訪問（小中学校、孤児院）
令和3年6月～	・バリダラ地区・グルシャン地区にある公園でのフィールドワーク
令和3年10月～	・ムクティジョグ（プロサッカーチーム）のレフリー支援（月1回、レフリーなど）
令和4年 9月～	・ダッカスポーツ教室（日本人会）

3.　報告結果と考察

(1)ダッカの朝夕

ダッカの人々は、夜明け前、昼12時、午後3時、夕方6時と夜8時ごろ午前から夜8時ごろの5回の約20分の「礼拝」をする。それを知らせるために、モスクからは民謡に似た呼びかけの大音響で流れる。そのため、人々は「礼拝」に合わせた衣食を含めた日常生活を送っている。

衣装は男性がバンジャビ（服）とトゥピ（帽子）を、女性がサロワカミューズ、サリーやアバヤを着用している。金曜日は特別礼拝の日でもあり特に正装している姿をよく目にした。最近、女性の服装はオレンジやブルーなどのカラフルなサロワカミューズ、若者の中にはジーンズやカジュアルな服装を身に付けている感じであった。現地の人に聞くと、家庭の方針で外出着が決められているそうであるが、露出は厳禁である。

ダッカには、至る所に飲食店、移動販売店、屋台などが軒を並べている。まるで昭和時代の商店街があちら

こちらにある感じでにぎわっている。そこには、チャイや炭酸水、クッキー、サンドウィッチやハンバーガーなどの軽食、サモサやシンガラ、ピアジなどの揚げ物、ビリヤニやベンガルカレーのご飯もの、パエシ（ミルク粥）やミスィテ（お菓子）、プディングなどの甘すぎるデザートを販売している。そして、路上で仲間と陽気におしゃべりしながら食している光景をよく目にした。一般的にダッカの人々は、夜 10 時ごろが最後のディナーで締めだそうであるが、食事の頻度や量が多く、人々のエンゲル係数が高そうである。特に富裕層の人々の体格のよさには、目を見張るものがあった。

(2) 格差と施し

ダッカ市内を散歩すると、オフィサー、ポリス、ガードマン、ゲートマン、ベアラー、バス・タクシー・CNG・バイク・リキシャなどのドライバー、建設現場の人夫、児童労働者、物乞いや路上生活者など多種多様な人々と出会った。服装や靴、アクセサリーなどもまちまちで貧富の差や格差を非常に感じた。また、通り沿いには総合商社や商業施設のビル、ファッション専門店、路上販売店（ベルト屋、靴磨き屋、マスク屋など）があり、所得に応じて利用できる場所も限られていた。さらに、住居に関してもバラックの家屋から高級アパートまでかなり格差がある。しかし、格差は客観的な視点であり、貧困層の人々を見たり話をしたりしても、格差を感じさせない笑顔で楽しく生活している様子であった。それは、バングラデシュの貧しい人々に「施をする」というイスラム教の教えがあるからだろう。「乞食」が街中を歩いたり路上に座ったりして物乞いをしている。また、渋滞で車を止めていると、「物乞い」や「物売り」が窓を叩き要求する。バングラデシュの人々は自然にポケットからお金を取り出し渡す光景をよくみる。手で物を口に入れる「ひもじいジェスチャー」をしながら物乞いする人の中には、しぐさや服装などを見るに違和感をもつ人もいる。でも、バングラデシュの人々は批判したり差別をしたりする様子もなく、お金を差し出している。

イスラム教の犠牲祭（イード）のとき、富のある人が解体業者に委託し牛やヤギ、トリを解体する。解体した肉は家族や親戚、知人に分けるだけでなく、貧しい人々に施しをする。また、富のある人々が、トラックに多くのお米や野菜などの食糧を詰め込み、人々に配給している。そのほかにも、何か祭りごとがあるたびに施しを与えている。貧しい人は老若男女に関わらず列をなして、食糧を手にしている。

(3) 田舎訪問

①川沿いの暮らし

ガンジス川の支流沿いにある村にアポイントもなしに訪れた。船着き場に着くと、数十人の老若男女が集まり歓迎してくれた。その村に一歩踏み入ると、ある女性が自分の家に招き入れてくれた。彼女の家は灰色の 3 階建てで、風通しもよく自然の風景にマッチしていた。屋上からは、村全体を一望でき、川も見ることができ緑が一面に広がっていた。田舎では、よくある光景だそうだ。彼女は祖父母・子ども 3 人との三世代同居家族だった。敷地内を見学していると、祖母が小魚を手でさばき昼食支度をしていた。小魚のフライをお馳走してくれると勧めてくれたが、有難かったが丁重に断った。この村の人たちは、漁や農業などの生業、水浴びや洗髪などの日常生活のすべてが川に依存していると、彼女からの話しで聞き取ることができた。自然を生かし、子どもも大人も仲良く協力し暮らしいる姿に共感した。まるで昭和の田舎感を彷彿した。親切で温かい人柄は、この環境からつくられたのだろう。船に乗り、村を離れるときには大勢の人たちが手を振って見送ってくれた。

②ヒンズー教の神事

ダッカから約 40 分間、飛行機に乗り、空港から約 30 分のところにある福祉施設を訪問した。そこのスタッフと意気投合し、彼の田舎に連れて行ってもらうことになった。オートバイの後ろに乗り約 1 時間、到着したのはヒンズー教の村だった。集落の聖地には、色鮮やかなマリーゴールドやハイビスカスなどが手向けてあり、長くて太い線香も焚かれていた。その日は、近所の人々が楽器を片手に集まり、歌と楽器演奏をし

てローカル神事が繰り広げられた。楽器はタブラ（太鼓）、ハーモニアム（鍵盤楽器）、エクタラ（一弦）とギターだった。人々は歌い踊り煙を吸って祈りを捧げていたる姿を、客観的に見ることで、彼らの熱い信仰心にふれ心洗われた。

③身近な人の家庭生活

私の家のドライバーや学校のスタッフの１人の家庭を訪問した。彼らは、ダッカの市街地から約１時間圏内の田舎で生活していた。しかし、ダッカは渋滞が日常茶飯事なので、毎日、バスとリキシャ、CNG（天然ガスの小型車）を利用して、2時間ぐらいかけて通勤してくる。

ドライバーは平地にある平屋の戸建てに、祖母、妻、子ども夫婦と孫2人と住んでいた。間取りは、4LDKで、部屋はコンクリートの壁で仕切られていた。キッチンは土間に水場とコンロがある程度の質素な造りであった。ダッカの寝室はほとんど蚊帳が吊るされたベッドであり、彼の家も同様だった。玄関にはアラベスク模様の装飾が施され、イスラム教一色であった。またバングラデシュはインターネットの普及率が高く、ほとんどの地域で携帯電話やスマホが使えた。だから、彼の孫たちは日本の子どもと同様にネットゲームに夢中であった。彼に頼んで地域の小中学校まで連れて行ってもらうことになった。小学校が休校だったので校庭に入っただけだった。校舎はコの字型の長屋で、ドライバーいわく、一教室に50人ぐらい子どもたちが寿司詰め状態で勉強するのだそうだ。

次に中学校に案内してもらった。校長室・職員室・2つの教室があるだけの小規模の中学校だった。教室では、男女共学で数学の計算問題をベンガル語の数字を使って解いていた。算用数字に慣れているものにとっては、きっと難解であっただろう。

「アポなし」訪問であったが、校長・教職員・中学生たちも温かく迎えてくれて、校内を案内してくれたり一緒に記念撮影をしてくれたりした。思いがけない出会いに心おどった日であった。

学校のスタッフは川沿いの少し高台に本家と分家で血族集落を作り、四世代共同でほぼ自給自足の生活をしていた。その部落では、コメを育て、鶏、ヤギや牛などを家畜に、ゴーヤ、ナスやトマトなどの野菜、檸檬やマンゴーなどの果樹、川では漁をして暮らしをしているらしい。彼は本家の息子で年齢は26歳、集落に自らの家をもち生計を立てていた。例えば、雨が降ると雨漏りがする家だったが、自ら得た給与で修繕をしたそうだ。本家や分家を回り、パスタやビスケット、チャイなどをふるまってくれて温かく優しくもてなしを受けた。とても緩やかな時間を過ごすことができ、幸せな気持ちになった。まるでこの集落は、昭和40年代の日本の田舎の姿の光景だった。

(4)準公立女子学校訪問

本校の幼稚園でお手伝いをしていた女性とその父親（綿輸入業者）とともに彼女が通う準公立女子学校を訪問した。この学校は幼稚園から高校までの一貫校で、エリート育成のための教育機関だった。バングラデッシュの学校は制服を着用している。特に、女子の制服は民族衣装をモデルにしているらしい。訪問した日が週休日で授業がなかったが、わざわざ事務局の先生が対応してくれた。教育制度はプライマリー（小学部5年間）とジュニアスクール（前期中等部3年間）、ハイスクール（中期中等部2年間）とカレッジ（後期中等部2年間）で、校舎も分かれていた。この日は、カレッジの校舎と校庭、講堂を案内してもらった。教室には3人掛けの机・椅子が横4列・縦10列が並んでいて、50人～80人の学生が授業を受ける。彼女が言うには、授業はほぼ講義形式で行われているので、おしゃべりをしたり寝ていたりする学生が多いそうだ。「主体的で対話的で深い学び」とは真逆な授業形態だと理解した。ただ、バングラデシュは中等教育《JSC（前期）・SSC（中期）・HSC（後期）》のそれぞれに認定試験があり、それに合格しないと卒業資格が取得できない。それを考えると、学生は主体的に学習せざるをえない。また、認定試験の優秀者は校内で表彰され名が刻まれ、彼女の名前も残された。校内を回っていて印象に残っているのは、教室の壁画と落書きだった。教室の壁画は1月新学年が始

まると、学生たちが新たな出会いを想像して教室の壁に絵を描くのだそうだ。廊下には自分の名前や韓国の推しメンの名前などが書かれていた。日本の学校より自由度合いが高い感じがした。事務局の先生が言われるには、1月に学校の用務員スタッフが学校環境を整えて新学年を迎えるとのこと。また学生は教員との関わりがよく、反抗することもなく一目置いているとのこと。幼稚園から中等教育まで、子どもたちが学校の親しみを覚え自らの成長を実感できるのは人的・物的な環境が整えられていたのだと想像する。

(5) 福祉施設

貧しい女性やストリートチルドレンのための支援施設が多くある。私は、ジョソールにある貧困女性を支援する施設とダッカの田舎にある孤児を養護支援する施設を訪問した。前者は貧しい女性の自立支援やその子どもたちの初等教育に力を入れていた。ここで、施設の目的や取り組みの研修を受け、施設の学校の6歳から8歳の子どもたちに、折り紙や簡単な日本語を教える機会を得た。子どもたちと先生は目を輝かせていた。その後、先生たちと教育研修を行って力量を高めた。

ジョソールの学校で授業を行う様子

後者は、父親の出稼ぎが原因で母子家庭となった子どもを引き取って生活と教育支援に取り組んでいた。この施設とはダッカ日本人学校とのお互いの文化交流の活動に取り組んだ。これらの施設に関係している女性や子どもは、支援を受け笑顔があふれ幸せそのものだった。

5. まとめ

今回の調査から、「個」を大切にし、自分の得（徳）のために人に施し、施しをもらうことに恥じらいもなく生活をしているバングラデシュの人々は「自由奔放」「天真爛漫」「悠々自適」という言葉が似合う。とても幸せを感じられた。また、現地の家庭を訪問すると、父親が子どもへのボディータッチが多く大切している様子が見受けられた。さらに、将来、子どもが豊かに生活できるように、親は子どもの教育にお金をかけている。やがて子どもが大人になり、親がしてくれたことを次世代に恩送りするようである。

子どもたちは、放課後に路地や空き地、公園などで、クリケットやバドミントン、サッカーをして遊んだり、裸足で駆け回ったりしている。田舎に行くと、素足で野を駆け巡り、川で泳ぎまわり、自然と一体化した子どもたちの姿があり、逞しさを感じた。まるで私の少年時代のころの様子が目の前で繰り広げられているようであった。

現在、バングラデシュは新興国として発展途上の国である。ダッカ市内を歩くインフラの整備や建設ダッシュであり、マンパワーが半端ない、まるで高度成長期の日本を思い出させる。今後50年、100年後、活気ある国になっていることだろう。